

## 幼児期の介入システムの確立とその効果

### — 極低出生体重児の発達検査からみた早期介入のあり方 —

(分担研究：ハイリスク児の発達支援(早期介入)システムに関する研究)

研究協力者：山口規容子

共同研究者：三石知左子<sup>1)</sup>、篁倫子<sup>2)</sup>、原仁<sup>2)</sup>、三科潤<sup>1)</sup>

要約：極低出生体重児に2歳から発達援助として、遊び・体操の早期介入の会を実施している。介入群(7例)と非介入群(12例)に対し、3歳時に新版K式発達検査を実施した。発達指数は介入群で87.3±11.1、非介入群で86.1±11.3と差は認めなかった。両群とも空間関係の理解、指先の器用さ、注意力の持続が不得手であった。極低出生体重児の早期介入は、健常児とは異なる発達の特徴を認識し、この点に留意した発達援助プログラムを用意することが必要と考えられる。

見出し語：極低出生体重児、発達評価、早期介入

緒言：NICU退院後の極低出生体重児(以下VLBWと略す)は発育・発達上で健常児とは異なる特徴を見せており、そのため様々な問題が生じやすく、親も育児上の不安を抱えることが多く、早期からVLBWとその親に対しての発達援助の必要性が認識されてきている。2歳児のVLBWに早期介入を実施してきているが、より効果的な早期介入プログラムを作成するために、発達検査を実施し、その結果からVLBWの発達の特徴を検討した。

研究方法：1992年10月から1993年9月までに東京女子医科大学母子総合医療センターで管理したVLBWで脳性麻痺、明らかな精神発達遅滞(DQ<70)のない23例中、発達援助早期介入プログラム参加希望者7名を介入群とし、このプログラムに参加希望せず、3歳検診を受診した12例を非介入群とした。

早期介入プログラムは1995年10月から開始し、月1回2時間で幼稚園教諭経験者を主体に医師・看護師が加わり指導している。

介入群、非介入群ともに「極低出生体重児のフォローアップを考える会」で勧めている全国統一フォローアッププログラムに則り3歳で新版K式発達検査を施行した。

結果：発達指数(DQ)は介入群は87.3±11.1、非介入群は86.1±11.3と両群間に差は認めなかった。領域別に見ると介入群では姿勢・運動(P-M)は90.1±10.7、適応・認知(C-A)は83.3±10.7、

言語・社会(L-S)は88.4±15.3であった。両群あわせた19例において3歳までの発達課題で未通過率50%以上の検査項目はP-M領域には認められなかった。C-A領域では2:6超~3:0での検査項目すべてが未通過率50%以上であり、空間関係の理解、指先の器用さが不得手であった。またL-S領域では「数の復唱」の検査項目が挙げられ、注意の集中力と持続力が不得手であった。

考察：発達を子どもが環境との相互作用を通じて主体的に選取り、獲得していくという自立的变化としてとらえるときに、環境並びに外からの働きかけが、発達を側面から助けていくものとして重要である。また発達課題に対して現実にあるスケールは、生活習慣の形成、遊び、道具の使用の順序・時期などを含めたこれまでに培われてきた文化的システムに基づくものである。しかしこの文化的システムの多くは健常児を中心に作り出されたものであるため、健常児とは異なる発達様式を持つVLBWに対しては、その発達の特徴を理解した働きかけを発達援助として用意する必要がある。今回の発達検査で、空間関係の理解、指先の器用さ、注意の集中力と持続力について不得手であるという結果が得られた。この点に留意した発達援助のプログラムを用いて児に働きかけをしていくことがVLBWに対してより有効な介入となると考えられる。

介入群・非介入群の3歳時新版K式発達検査結果

|             | 出生体重(g) | 在胎週数(w) | DQ     | P-M    | C-A    | L-S    |
|-------------|---------|---------|--------|--------|--------|--------|
| 介入群(7) 平均   | 1,289   | 29.4    | 87.3   | 90.1   | 83.3   | 88.4   |
| 標準          | (142.6) | (1.5)   | (11.1) | (10.7) | (10.7) | (15.3) |
| 非介入群(12) 平均 | 1,095   | 30.2    | 86.1   | 92.1   | 85.7   | 82.9   |
| 標準          | (199.0) | (3.0)   | (11.3) | (12.2) | (10.2) | (14.3) |

1)東京女子医科大学母子総合医療センター

2)国立特殊教育総合研究所



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:極低出生体重児に2歳から発達援助として、遊び・体操の早期介入の会を実施している。介入群(7例)と非介入群(12例)に対し、3歳時に新版K式発達検査を実施した。発達指数は介入群で $87.3 \pm 11.1$ 、非介入群で $86.1 \pm 11.3$ と差は認めなかった。両群とも空間関係の理解、指先の器用さ、注意力の持続が不得手であった。極低出生体重児の早期介入は、健常児とは異なる発達の特徴を認識し、この点に留意した発達援助プログラムを用意することが必要と考えられる。